
散華

河野 美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

散華

【Nコード】

N3612T

【作者名】

河野 美月

【あらすじ】

「いつまで、逃げ続ければいい・・・」声を奪われ、知らない世界を放浪する女。

女はやがて、一人の男と出会う。

それは彼女の生活を一変させ、将来をも変えてしまう。

静かな生活を望む女と、女を望む力ある男の物語。

降り注ぐ、花びら。(前書き)

どうしても書きたくなっではじめてしまいました・・・

このお話は中篇ぐらいの予定です。

お楽しみいただければ幸いです。

「残酷描写」「R15」ですので、不快な方はゴエンリョください
い(ぺこり)

降り注ぐ、花びら。

思い出すのは決まってこの情景だ。

はらはらと、音をたてて散りゆく、花びら。

私は、どうして、

あの時、振り返ってしまったのだろうか・・・

ここは高い山に囲まれた狭隘な地にある、鄙びた村だ。

厳しい生活環境にあったが、動物を飼い、その乳や毛から作られるものを売って、生計を立てることが出来た。

この村に、どこから来たのか分からないが、老婆が住み始めて3年程が経つ。

人の少ない村なので、彼女のごとはすぐに話題となり、村人達がこぞって彼女の元に行くと、彼女は身寄りがなく、静かな場所で暮らしたかったため、王都での生業をたたみ、この土地までやってきた、と言った。

彼女は薬師くすしであった。

村人は彼女を歓迎し、空き家を改修して住めるようにした。

彼女には蓄えがあるようで、改修費用をきちんと支払い、村の若

い夫婦に食料の調達をお願いした。

それから、さまざまな材料を用いて薬の調合をはじめ、月に一度村人に、近くの街で開かれる市で、薬を売りに行ってもらっていた。

彼女の薬は効能があると評判で、街でなじみになった店の一角に、薬を置いて売ってもらうようになっていた。

だが、彼女は決して、村から出ることはなかった。

家から出ることも稀で、彼女の姿を見るのは、彼女の家に食料や必要な雑貨を持っていく若夫婦の妻か、薬を売りに行ってくれる村人くらいで、彼女はいつも、深くフードをかぶり、顔を晒すこともなかった。

ただ、彼女は決して外に出ないわけではない。薬草を摘みに行くため近くの山に登ったり、薪を集めるため近くの森の中に入ったりしていたが・・・それはいつも、誰の目にも触れない、夜更けのことであった。

彼女には、人前に出られない理由がある。

さらさらと、流れる水の音がする。

家から出て、初めて入る森の中、ふと視線を上げると、何かキラキラと光っていた。

先程まで足元を見ながらゆっくりと歩いていたため、気づかなかった。

彼女はこの村に住んで3年程が経つが、ここは本当に山深く、彼女が未だ足を踏み入っていない山や森がまだまだたくさんある。

今入っている森もそのひとつで、村からはかなりの距離がある。彼女は食料がなくとも、山や森の恵で食べていけるので、ほんの4、5日は何も持つていなくても平気だ。そこが恵みある森や山であれば。

彼女が今住んでいる村に定住しようと思ったのは、村が恵まれた自然に囲まれていたからだ。それに王都に住んでは手に入りにくい薬草が、ここでは自然に手に入る。薬師として、本当に探求に値する場所なのだ。

目の前にある光に誘われるように、彼女は早足で駆けていく。とても老婆とは思えない動きだ。

ふあさり、と頭にかぶっていたフードが取れる。

フードの下にある顔は・・・若い、女の顔だった。

黒い髪は長く、少し癖があつてうねつていて、腰のところまで伸びている。

象牙色の肌は、闇の中でほのかに白く浮かび上がり、くつきりとした眉と、つぶらな大きな瞳の色は、今は闇の色と同じように見えるが、陽の元で見たら明るい茶色の瞳が見れただろう。

あまり高くない鼻に、薄めの唇。

・・・彼女は日本人だった。

彼女は、気がつけばこの世界にいて、薬師の師匠と共に各地を放浪していた。

それが、5年。

彼女は25歳になっていた。

何故、この世界に来てしまったのか。

・・・桜の花びらが散る、あの道で。

誰かに呼ばれたような気がして、振り返ったら。

師匠の前に、立っていた。

降り注ぐ、花びら。(後書き)

続きます・・・

割とすぐTOPページにきますので。

散る、花びら。

目の前に、小さな泉があった。

今日は満月だったのか。

・・・声を失ってなお、唇が動くのは何故だろう・・・

必要ないのに。

師匠を亡くしてから、奪われたのは声だけでなく、安穩な生活。姿を隠して、各地を点々とする、日々。

・・・いつまで、続くの？

枯れた、と思った涙は、するすると頬を滑り落ちた。

「何故泣く」

目の前に、男の姿があった。

あまりのことに、体を動かすことが、できない。

男は大きな手で、つい、と彼女の頬の涙を拭った。

気配には聴くなつたはずなのに、目の前の男の気配には気がつかなかった。

今更ながらに、目の前の男の存在に震えがきた。

自分の体を守るように、彼女は両腕をしっかりと握った。

震えは止まらない。

男は戦士のようなようだった。

がっしりとした体つき。彼女が見上げるほどの背丈を持ち、金糸のような髪が背の半ばまで伸ばされていて、緩やかにウェーブを描いている。

彫りが深く、眼光鋭い男、だった。

やたらと威圧感があつて、以前一度だけ出会った男に似た雰囲気をもつ男。

嫌な予感しかしない。

深い青色の瞳、のようだった。

深くて、すいこまれそう。

そんな風にのんびり考えていたら、彼女の涙を拭いた手はそのまま彼女の腰のところで留まり、気がつけばぐっと抱き寄せられていた。

声にならない叫び。

組んでいた手を離し、男の体を避けようとその胸に手を当てて押し退けたが、男の体はビクともしない。むしろ離すまいとますます力を込められて、彼女は完全に男の胸に収まってしまった。

男の鼓動は早い。

・・・ドキドキしてる？

捕らわれているのは私なのに、相手の反応が気になるなんて、何か可笑的い。

でも、こうして他人に触れられるのは久しぶりで、懐かしい感じがして、自分がどれだけ孤独だったのか知らされる。

人のぬくもりは久しぶりで、縋りつきたかった。

だが、それは、彼を、自分の過酷な運命に引きずり込むこととなる。

師匠のように。

ひとしきり触れた男の胸から、顔を上げると、「離して」という気持ちを含めて、男を見つめた。

男はため息を吐くと、そっと、彼女の体を離した。

目の前に現れた彼女を、師匠は特に驚いた表情もせず受け入れ、共に連れて行ってくれた。

聞けば、彼女のように突然この世界に現れる存在があるらしい。旅をしている間に、彼女はあらゆる時代あらゆる世界から、この世界に「流されてきた」人たちと、会った。様々な話を聞くことが出来て、とても楽しかった。

師匠がいたから。

師匠は、この世界では珍しい「魔女」と呼ばれる人であった。この世界の理を知り、「魔法」を操る、女性。旅をしている間は、師匠が彼女のことを気にかけてくれて、守ってくれていた。

目の前で、殺されるまでは。

目もくらむような怒りを感じた。
モノか何かのように、師匠の遺体を扱い、その存在をなき者にした。

師匠は何も悪くないのに。

「私」を守ったから？

この容姿に何の意味があるの？

身の内に宿る力を使って、人を傷つけたのは、その時が初めてだった。

花を散らすように、

私は、この世界で忌み者とされる「魔女」となり、ヒトの命の輝きを奪ったのだ・・・

散る、花びら。(後書き)

散っても、なお。

「身の内に溢れんばかりの魔力がある・・・お前、魔女か」

男は、彼女が手を伸ばせば届く距離に立っていた。

彼女の姿を上から下まで眺め、最後に長い黒髪を手取る。

艶やかで、滑らかな触り心地だった。

・・・このままここに立っていたら、問答無用で襲いそうだな。

男がまた一つ、ため息を吐いた。

彼女は男を見つめたまま微動だにしなかったが、遠くから聞こえる何かの鳴き声に反応して顔を上げた。

「リグイルが来たか」

男はそうつぶやくと、素早い動作で彼女を抱えあげた。

まるで荷駄袋が何かのように肩に抱えあげると、何の前動作もなく跳躍した。

一気に視界が上昇し、気がつけば彼女は、男と共にドラゴンの背に乗っていた。

声をあげる暇もなかった。

・・・でないが、出ていたら森中に響き渡るような声で悲鳴をあげていたに違いない。

心臓が止まりそうなほど、驚いたのだ。

ドラゴンの背に乗るのは初めてのことだった。

その存在は、師匠から聞いていて知ってはいたが、彼女が住む大陸にはいない、と聞いていたし、実際目の当たりにするのは初めて

だった。

硬いうろこに覆われたからだ。鋭い爪や牙がある。ファンタジー世界の住人だ。

・・・今は自分もその一員なのだが。

とても賢い生物で、自らの主と定めたものに忠実で、存在自体が大変貴重なのだ。

どうやら男が飼い主らしいのだが・・・

「このままアリアネンドに行く」

アリアネンド？

この大陸では聞いたことの無い場所の名だ。

もしかして、海を越えたところにある大陸の名前なのだろうか。

「俺はアリアネンドを治める王だ。そして、女。そなたが共に旅をしていた女の弟だ」

「！」

・・・その言葉に、彼女は気を失ってしまいそうなほど驚いた。

リレイラ。花の名前を持つ、貴方。

私を救ってくれた貴方を、私は何故、救えなかったのか・・・

目の前にいる傲岸不遜な男は、エディアルド、と名乗った。

アリアネンドを統一した後、リレイラを探してこの大陸を旅していたという。

「リレイラは、殺されたのだろうか？」

ドラゴンの背に乗ってしばらくすると、エディアルドが顔を寄せ

てきた。

彼女は、黙って頷く。

彼は黙って、彼女の表情を見つめていた。

「そのいやらしい感じの呪詛・・・『皇国』の呪術師にやられたか」

彼女の首筋に触れ、まるで何かを確かめるかのように、指を滑らせた。

彼女はその感覚を嫌がって身を振った。だが、ドラゴンの背は狭く、そうそう動けるものではない。そんなにすわり心地の良いものでもないし、空の高いところを飛んでいるので、やたらと動いて墮ちるようなまねはしたくなかった。

そんな状態なのにナニを考えているのか、エディアルドは彼女にぴつたりとくつついてきて、あちこち触れていた。

彼女は何故か逆らうことが出来ない。それもこれも、師匠・・・リレイラに、「バカで出来ない可愛い弟」の話を散々聞かされていたからだろう。師匠は、遠くに離れていたが、弟のことを本当に愛していた。

リレイラは自分の出自を語ることはしなかった。それは彼女が「魔女」であるが故のことであったのだろうが、まさか、隣の大陸の王が弟であるなんて思いもしなかった。

魔女の存在は、禁忌。

その存在は、人々に災いをもたらす。

この世界の不文律だ。

では何故、私はここにやってきたのだろう。
そして、リレイラは何故、殺されなければならなかったの？

師匠が殺される場面が何度も記憶に甦り、眠れぬ日々が続いた。
どんなに夢を見ても、師匠を助けられないのだ。

師匠は私に薬草の知識は教えてくれたが、魔術については教えてくれなかった。

魔力のある女性は、その身の内にある力を使ってしまったら「魔女」となってしまう。

だから、師匠は決して、私に魔術を教えるはくれなかった。

だが、私は師匠の願いもむなしく、魔術を使い、人を殺した。
殺したのだ。

「そなた・・・人を殺したのか」

魔力を持つものがその力を使い、生命を奪うと、力が濁るといふ。
魔力を持つ人間が、力を使った人間を見ると、濁りが分かる。
命を奪った数だけ、濁りが深くなる・・・

私の魔力は、きつと濁りきつているに違いない。

だが、なぜ、彼は私の魔力を見ることが出来たのだろう。

この世界では、魔力は女性にだけ与えられたチカラ、だといふの
に・・・

散り行く先は。

「ああ、そろそろアリアネンドが見えるぞ」

エディアルドは暗闇の中、何故か明るく輝いて見えるほうを指差した。

月はそろそろ西の方に傾いており、未だ夜明けには時間がありそうだった。煌々と輝く建物は遠くから見ても巨大で、その明かりも松明等ではなく、魔法によるもののようにだ。

ここが師匠の生まれた国であると思えば、何故か不思議な気がした。

魔女は自分自身のことを語らないため、特定の居場所を作らないし持たないものだから。

叶うなら、師匠と共に来てみたかった。

あの、豊かな表情と明るい声で、この国のことを教えて欲しかった。

だが、奇妙な出会いで、彼女はその弟と、師匠の生まれ故郷に足を踏み入れることになった。

エディアルドが指し示した方向にあったのは、アリアネンドの王宮であった。

ドラゴンがゆっくり降下している。その先には、王宮の中心でひとときわ高い台形の建物があり、ドラゴンはどつやらそこに降りるらしい。

「リグイル、よし」

ドラゴンはその巨体にも関わらず丁寧に着地してくれた。ほとんど揺れを感じない着地で、彼女は知らないうちにこわばっていた体から力を抜いた。

先にドラゴンから下りたエディアルドが、彼女の方に手を伸ばした。

彼女は少し戸惑ったような表情を見せたが、おずおずと小さな手を出して、エディアルドの手に手を重ねた。

エディアルドの手にぐいっと引かれたかと思うと、彼女は彼の腕に囲われていた。

またしても不意打ちのようにエディアルドに抱きしめられ、彼女はむかっとした。彼にとつて自分は何なのだろう。恋人でもないし、ましてや血縁関係も無い。こんな風にべたべた触られる筋合いはないのだ。

そんな彼女の気持ち表情に表れていたのだろうか。エディアルドは彼女の顔を見るとにんまり笑い、抱きしめる腕にますます力を加えた。

死にそうです。

窒息しそうな圧力を加えられ、なんとかエディアルドの腕を逃れようともがくが、その腕の力はちっとも緩まない。

両の手を背中にまわし、バンバンと思いつき叩くが、彼にはちっとも効果がないようだ。

そんな彼女の窮状を救ってくれたのは、聞き覚えのある、声。

「エディアルド、そんなに抱きしめてはつぶしてしまつよ」

明るい、声。

涙が出るほど、懐かしい声、その響き。

「お師匠様・・・」

彼女の目の前で死んでしまったはずのリレイラが、嫣然と微笑んでいた。

散った花の理由。

「私はリレイラではないわ」

師匠と同じ顔で、声で、残酷なことを言う、女性。

確かに、師匠と持つ雰囲気は違っている。

師匠より少し低めの声。体型も違う。師匠は女性らしいまろやかな体つきであったが、目の前の女性は、鍛えられた体をしていて、胸もあまり無い。

話し方も師匠と同じで、知らないうちに彼女は、涙を流していた。

「泣くな・・・」

抱きしめる力を緩めてくれたエディアルドが、大きな手で彼女の頬に流れていた涙をゆっくり、拭ってくれた。

彼女はエディアルドから体を離すと、ゆっくりと師匠にそっくりの女性に近づいた。

「お師匠様の、お姉さまですか？」

「そうよ、ユーリ。貴方と共に旅をしていたのは私の双子の妹」

ゆっくりと、彼女に近づいた師匠そっくりの女性は、近づいてきた彼女の顔をじっと見つめて、ゆっくりと微笑んだ。

「私の名はエレイラ・・・貴方はユーリね・・・私達と同じ、魔法の娘。貴方にはつらい思いをさせてしまったわね」

そういって、エレイラは彼女・・・ユーリをゆっくりと抱きしめてくれた。師匠と同じ香りがした。

「私・・・私、貴方の妹さんを救えなかった」

「いいの・・・貴方を救ったのは妹の意志」

そういうと、エレイラは抱きしめていたユーリの顔をじっと見つめた。

「あの子は魔女としての生に飽いていた・・・アリアネンドの王女として生まれ、エディアルドを助けてこの地を治めるためにたくさん命を刈り取って・・・それから、一度たりとも、この国に戻ってくることはなかった。」

皇国のある北の大陸にいけば、殺されるとわかっていても

「どうして」

「それは」

つらそうな顔をしていた。悲しませたくはなかったが、どうしても知りたかった。

「どうして、師匠は危険を犯してまで、旅をしていたの？」

「・・・北の皇国の皇帝を、愛していたから」

北の皇国の皇帝。

師匠を殺した男だ。

目の前が、真っ黒になった。

魔女の容姿には特徴がある。

黒目、黒髪。

ユーリは正に、魔女の外見をしていた。

この世界では、黒目・黒髪の色素を持つ人間は珍しいのだ。

もともとの色素で生まれていなくとも、魔力を使い、人を殺し

てしまえば、黒目、黒髪に変わってしまったのだそうだ。

だから、師匠と初めて出会ったとき、本当に驚いた。

日本人離れた顔立ちをしているのに、髪と目の色が真っ黒なのだ。

魔女と呼ばれる女性に何度か出会った事があるが、黒目、黒髪の女性は師匠以外にいなかった。

むやみに人の命を奪おうとする者などいない。「魔女で黒目・黒髪」とは、罪人の証なのだ。

ただでさえ、魔女の存在は禁忌とされているこの世界で。

最初から黒目・黒髪を持つユーリ・・・百合香ゆりかの存在は、魔女の象徴のようなもので、皇国に存在を確認されて以来、ずっと、追われていた。

なにもしていないのに。

私の存在が、罪そのものなの？

生きるために他のものの命を散らすのは、どんな者だってやっていることなのに。

何故、魔女だけが責められるの？

北の皇国は、この世界でも一番信仰されているメッセア教の始まりの地で、「魔女は禁忌の存在」と流布しているのは、この教会の教義の一つにあった。

魔女は自然の力を引き出す存在であるのだが、メッセア教はそれを「悪の力」とし、メッセア教の信仰対象である、天空の至高神「

メッセア」の力以外を認めなかったからだ。

魔女は世界の理を知り、操る。

自然そのものの存在であるのに。

北の皇国は、ひたすらにそれを隠し、魔女を狩り立てる。

なのにどうして、師匠は皇国の皇帝を、愛してしまったのか・・・

花のある場所。

目を覚ますと、見知らぬ天井が見えた。

ゆつくりと体を起こすと、さらさらと上質な布団の上掛けが捲れた。体を見下ろすと、今まで着たことの無い上等な布で出来た、クリーム色の肌着を身につけている。

いつの間に運ばれたのだろう。

エレイラから衝撃の事実・・・北の皇帝を、師匠が愛していた、という言葉聞いて、目の前が真っ暗になって・・・

ユーリがぼんやりと昨日のことを考えていると、突然扉が開いて、エディアルドがずかずかと入ってきた。

「起きたのか」

ユーリが瞬きをする間もなく、彼は彼女が座っているベッドの近くまでやってきた。

彼女は咄嗟に薄い布団を肩までかけて、見えている体を隠した。

エディアルドはそんなユーリの様子を見てニヤリ、とすると、彼女のそばに素早く近づき、頬に口づけた。

「な、なにを」

エディアルドに触れられた頬を押さえて、ユーリは彼を睨みつける。だが、その頬は紅く染まっていて、彼女のものなれない様子が、彼は内心喜んでいた。

「可愛らしい声だな」

ハツとして、ユーリは喉に手を当てた。いつもは感じる禍々しい気配が、今は感じられない。

「気づいてなかったのか？姉上とお会いしたときに、そなたは声を出して話していたんだぞ」

さすがだな、と、エディアルドは感心したようにつぶやいて、ユ

ーリの喉に触れた。

昨夜は触られるのが嫌だったのに、今はなんとも思わなかった。呪いのせいだったのか、それとも・・・

以前はあんなに声を出したいと望んでいたのに、どうして、この呪いは解けたのか。

「そなたには、魔女の中でも最高の力がある。呪術師の呪いなど、そう簡単に受けるはずはないのだが・・・

リレイラのこと、そんなにショックだったのか」

エディアルドのその台詞に、ユーリは素直に頷いた。

ユーリにとって、リレイラ存在は、この世界で自分に一番近いもの、だった。

母親のように、姉のように、先生のように、慕っていた。

彼女がいなければ、ユーリはこの世界で、こんなにも長く生き残ることはできなかつたに違いない。

ユーリに生きるための術を教え、導いたのは、リレイラだった。ある意味、自分の本当の家族よりも長く、密接につながっていたのだ。

この世界に出現してから、師匠が殺されるまで、ユーリが彼女から離れる時間はそれほどなかった。雛が親鳥を求めるように、ぴつたりとくつついて離れなかったのだ。

そんなユーリのあり方を否定せず、師匠はずっとそばにあることを許してくれた。

ユーリが文字を覚えようと勉強するのも手伝ってくれた。

お金のないユーリに援助してくれて、薬草の知識を惜しみもなく教え、収入を得られるようにしてくれたのも師匠、リレイラだ。

彼女には、返しきれないたくさんの恩がある。

「こんな、得体の知れない私に、彼女はたくさんのものを与えてくれたの……」

ユーリの眦から、涙が零れ落ちた。

エディアルドはゆっくりと、手を伸ばして彼女の涙をぬぐった。

「リレイラ、姉上は、そなたのことが本当に、大切だったのだな」
彼は、どこか寂しげに、そう呟いた。

「ところで、ここはどこ？」

涙を拭きつつ、ユーリがエディアルドにそう尋ねると、彼は、彼女にとって衝撃の事実を言った。

「ここは私の後宮だ。今後はここで過ごしてもらおう」

「は？」

「だから、ここは私の妻が住まう宮だ。ユーリはここにいてもらう」

「な……」

なんて、言ったの？

「ちなみにユーリ以外の女はいない。私の唯一だからな」

そう言っつて、ゆっくりユーリの頭を撫でるエディアルドを、彼女がぐーで殴ったのは、無理もない話だ。

エディアルドの言葉は本場で、ユーリはしばらく部屋から外に出してもらおうことができなかった。

エディアルドの妻なんて、無理……！

ユーリが声を大にして叫んだ言葉は、誰にも聞こえず、ただっ広い宮に響いていくのみで……

私は、どこまで流されていくの？

路傍の花のままです。

「ここから出して」

「断る」

「私、あなたのため、妻になんてなる気無いの！」

「残念だが、婚儀は10日後だ」

「はあっ!？」

「久方ぶりの魔女との婚姻だからな・・・ジジイどもが騒いでるんだ。いまおとなしくさせてるところだ」

「何の話よ」

「心配しなくてもいい・・・あんまり騒ぐと、体で分からせるぞ」
俺のモノだつてことをな・・・耳元で囁かれた言葉と息で、背中がゾクリ、とした。

あわてて首を横に振りまくと、(ユーリにとって)魔王のようなアリアネンドの王、エディアルドは、上機嫌でユーリの部屋の扉をくぐって外に出て行った。

こんな会話が、最初の朝から毎日繰り返されている。

ユーリがアリアネンドに着いてから、もう10日を数える。

その間、彼女は、エディアルドの言葉が本当であるということを、エレイラから聞いて(実際に宮を歩いても見たが)認めざるを得なかった。

彼女が普段過ごしている部屋は、どうやら後宮の最奥にあるらしい。

後宮でも一番広い部屋で、王の寝室とつながっており、部屋の間には、王と王妃が使用する居室が設えてある。シンプルだが日の光の十分に入る設計になっている部屋は快適で、軟禁(半監禁?)生

活を余儀なくされているユーリの慰めになっていた。

たくさんの蔵書と、豊富な薬草類が（何故か）乾燥しておいてあったので、ユーリは手慰みに調薬しては、彼女の世話を命じられているらしい侍女たちに、役に立つようと王宮侍医の元へ運ばせていた。

いつも、誰かに追われている生活をしていたユーリは、この世界に来て、やっと、落ち着いて過ごすことができたのだが・・・
引き換えに好きでもない男と結婚するのは、論外だ。

だが何故か、ユーリはどうしてもエディアルドに逆らうことができなかつた。

あの深い青い瞳に見つめられると、反抗する気力が奪われてしまふ。

ここで、本当に「嫌だ」といっておかないと、なし崩し的に彼と結婚する羽目になってしまう・・・！！

一人でいるときには、「絶対に結婚しない」と強く思っている、エディアルドの前になると、言えなくなってしまう。

本当は、彼と結婚したいのか、私・・・
そう考えて、ユーリは緩く、頭を横に振った。

王の妻なんて、私に勤まるはずも無ければ、そもそもエディアルドのことを好きかどうかすら、分からないのに。

ユーリは小さく、ため息をついた。

こんな風を守られていて、安心感をおぼえてしまったためか・・・
強くあらねば、と思っていたのに、今は安らかな気分であることが

多くなつたからか。

エディアルドは強引でも、触れる手は優しくて・・・自分に無理強くないと思つてゐるせいなのか。出會つてそんなに経たないのに、師匠の身内だからなのか、安心しきつてしまつてゐる自分がある。

それがいいことなのかどうか、ユーリには分からなかつた。

どうか、このまま私のことを放つておいて。

そつとしておいて。

誰も知らない場所で、ひっそりと暮らしたい・・・

そつつぶやくユーリの台詞は、誰の耳にも届かなかつた。

花は知を欲する。

ユーリが軟禁されてから、15日ほどが経過していた。

その間、毎日訪れるエディアルドとエレイラ以外、数人の侍女や近衛兵たちの存在にも慣れ、ユーリは心静かな生活を送っていた。

だから、油断していたのだ。

自分は追われている身であると言っのに。

後宮にやってきて以来、ユーリは太陽が眩しくなると目を覚ます生活を送っていた。

逃亡生活中は、こんな風にゆっくりと眠った記憶が無いほど、張りつめた生活を続けていたから、今の生活は、ユーリにとって本当に贅沢なことだった。

彼女が目を覚ますと、侍女の一人がゆっくりと「おはようございます」と声をかけてくれる。

それから、天蓋のカーテンを四隅に分けて開き、お手水を持ってユーリのベッドの近くにやってくる。

ユーリはベッドから降りると、顔を洗うために用意された器で顔を洗い、侍女が差し出したふわふわのタオルで顔を拭いた。

それから、用意された服に着替えるのだが・・・いつもはタイミングを計ったかのように、エディアルドがやってくるのであるが、今日は着替えが済んで、朝食をとるために居間に入っただけでもエディアルドは顔を出さず、いつもは扉の外で待機している近衛兵が二人、居間の端っこに立っただけで、ユーリはなんだか落ち着かない気分を味わった。

「今日は何かあるのですか？」

食事が済んだ後で、侍女・・・今日は一番年高のレシーナが一緒にいた・・・に聞いてみると、彼女はちよつと首をかしげた。

「ああ・・・本日は北の大陸からお客様がお見えになるのです。それで、王命によりユーリ様がこの部屋から出られないよう、近衛が追加されたのです」

「お客様？」

「ええ」

北の大陸、と聞いて、ユーリはなんだか嫌な予感がした。

続けてレシーナは、ユーリに告げたのだった。

「北の皇帝がお見えなのです。アリアネンドの王にお会いしたいとのこと」

目の前が、真っ白になった。

レシーナはなおも話を続けた。

「この度、王はユーリ様とご婚姻なさると、大陸全土に通知しております。

この王国では、魔女との婚姻が、王の一族に繁栄をもたらすと言い伝えられておりますので、その倣いに従い、王はリレイラ様の許に出現した魔女・・・ユーリ様を、北の皇国まで探し出されたのです。

わが王国では魔女は繁栄をもたらす存在とされていて・・・エレイラ様の星読みにて、ユーリ様の出現は予見されていたのです。王族の誰かの元に、現れると。

まさか、出奔なされたりレイラ様の許に出現されるとは、私たち

も予想がつきませんでした。

「ご存知かとは思いますが、北の皇国では、魔女は忌み者とされておりますね。」

皇帝がやってきたのは、今回の王と魔女との結婚について、メッセア教の教義に則り、阻止するためですわ」

レシーナが語る言葉は、どれも本当のこのようだった。

信じられない、というような表情でレシーナを見つめていたせいだろうか、彼女はユーリの表情を見ると苦笑して、小さなため息を吐いた。

「本来ならば、このお話はエディアルド王よりなされなければならぬお話であるにも関わらず・・・私の方から申し上げましたのも、このまま何も教えられずにご婚姻されるのでは、ユーリ様があまりにも気の毒でございましたから・・・」

申し訳なさそうにそう言って、レシーナはゆっくりと頭を垂れた。

レシーナはこの後宮の中の侍女たちの中でも、身分の高い侍女のようだった。聞けば、エディアルドの乳母で、現在は後宮の侍女長を務めているとのこと。

この後宮ではとても大切な存在なのだ。

そのほか、レシーナは様々なことをユーリに話してくれた。

エディアルドの生い立ち、アリアネンド王国のこと、エレイラとリレイラ、双子姉妹のこと。

そうして気がついたら、お昼近くになっていた。

ユーリは、やさしくて強いレシーナのことを好きになった。

母親のように、懐が深く、暖かい・・・

結局その後は、レシーナとゆっくり話すことはできず、近衛と他の侍女たちに囲まれて昼食を取り、日が暮れるまで本を読んでいた。アリアネンドの歴史書だった。

魔女が「繁栄を約束するもの」であると、レシーナは言った。

北の大陸・・・特に皇国の考えとは真逆だ。

どうしてそのように言われるようになったのか、ユーリは知りた
いと思った。

だけど、結婚なんてしない、と、心に固く、誓いながら。

自分を追ってきた北の皇国皇帝の存在に怯えながらも、何故か、
ここにいれば大丈夫、と、安心していた。

野分？

「久しぶりだな、『厄災の娘』よ」

見下ろしてくる傲岸不遜な眼差しは、鋭く深い青色の瞳。

ゆったりと纏ったロープは真っ白で、おそらくシミ一つついていないだろう。

何度もリプレイしてしまう過去の情景の中で、目の前の男は無表情に、何のためらいも無いような表情で、剣を振り下ろした。

師匠の、首筋に。

夥しい紅の血は、あの日、今日と同じように白いロープに降りかかり、私の世界も真っ赤に染めた。

あの日から、目の前の男は、何一つ変わっていない。

まず最初に感じた思いは、「怒り」だった。
恐怖ではなく。

あの日と同じように、私を見下ろしてくる「北の皇国」の皇帝・オレスティン3世は、睨む私の瞳をじっと、見つめていて。その表情には、少し驚きの色が見て取れる。

師匠が殺された、あの日。

私はただ、怖くて、逃げることしか考えられなかった。

師匠は、北の大陸を放浪していれば、いずれは殺される運命にあると、ある時ぼつりと、そう言った。

ここでは、私たち魔女は禁忌の存在であると。

「厄災の娘」と恐れられ、常人には恐れられ、忌避される存在の魔女が、生きることが難しい土地であると。

そう言いつつも、師匠は北の大陸を放浪するのをやめなかった。南には、魔女が存在することが許される場所など、いくらもあると聞くのに。

師匠は、頑なに、北の大陸を出ることをしなかった。

目の前にいるこの男を、愛していたから？

そんなこと、ユーリには受け入れられなかった。

オレスティン3世は、あの日、殺し損ねた「厄災の娘」を目の前にして、少し驚いていた。

あの時は、ただ怯え、震えていた娘が。

現実より逃避し、身のうちにある力を揮い、皇国の呪術師を残らず再起不能にし、転移して逃げた小娘が。

今は皇帝たる私の目を見据えて、怒りをあらわにしている。

気に入らない。

オレスティン3世は、ゆっくりとユーリに近づいていった。

アリアネンド王宮の、王の庭で。

ユーリは図らずも、北の皇国皇帝、オレスティン3世と望まぬ再会を果たした。

実は、足が動きません。

ユーリは近づいてくるオレスティン3世から離れようと、足を動かそうとしたが、膝が笑い、足はその場に根が生えたように動かず、若干自分の背中に冷や汗が流れているように感じた。

目の前にやってくる皇帝からは、「気に入らない」オーラがビシバシ漂っていて、強がって彼のことを睨んでいたユーリは、少しばかり後悔した。

ここはアリアネンドの王宮なのに。

エディアルドに迷惑がかからないとも限らないのに、北の帝国の皇帝に喧嘩を売るようなことをしてしまった自分の軽率さにいささか呆れ、ユーリは下唇をかんで俯いた。

自分のつま先を見ていたユーリの前に、誰かが立った。

正式な王の装束を見慣れていたユーリは、その靴を履いている人物が自分を庇うように立っているのを感じ、顔を上げ、その背中を見つめた。

いつも柔らかな声しか聞いたことの無いユーリの、聞き覚えの無い・・・ぞつとするような冷たい声で、アリアネンドの王、エディアルドは、オレスティン3世に言った。

「貴方がなぜ、ここに」

ゆっくりとユーリの背中に腕をまわしたエディアルドは、彼女を自分に引きつけ、隣に立たせた。

「ここは『王の庭』。私の家族以外は立ち入りできないようになっていてるのですが。」

「・・・もしや、迷われたとか」

エディアルドの丁寧な口調は、本当に慇懃無礼だな・・・などど失礼なことを考えつつも、ユーリは彼のおかげで足を動かすことが叶い、いつでも動ける体制を整えることができた。

対するオレスティン3世は、突如出現したアリアネンドの王に驚きつつも、それを表情には出さず、ゆっくりと、頭を下げた。

「そうですね・・・迷い込んでしまったようです。ご案内いただくと思います、そちらの方に声をかけたのですが」

「そうですか。では他のものに案内させましょう。宰相」

エディアルドが声をかけると、傍に控えていた宰相のミルドレッドが丁寧に頭を下げ、皇帝を案内していった。

知らないうちに息を詰めていたらしい。

オレスティン3世が見えなくなつて、ようやくユーリは思いつきり息を吐いた。

皇帝が見えなくなつても、エディアルドはユーリの腰を掴んだまままだ。

彼女はするりと身をかわすと、彼の目の前に立って、ゆっくりとお辞儀をした。

「ありがとうございます、エディアルド・・・助かりました」

「いや。かまわない・・・だが、なぜこの場所にいるのか、そのことは説明を」

「あ・・・はい」

そうして、今朝面会を求めた人物のことを、エディアルドに説明した。

野分？

北の皇国の皇帝の来訪を聞いてから、ユーリは落ち着かない気持ちをもてあまして、自室で過ごしていた。

読みかけの本も、調薬も気が進まず、起床してからずっと、王の庭園を眺めていた。

朝食後は侍女たちも忙しかったようで、ユーリは珍しく、部屋に独りきりになっていた。

扉の前には護衛の騎士が立っていたが、彼らは基本、親しく声を掛けてくることは無かった。

・・・というか、声を掛けるのを禁じられていたらしい（エディアルドに。後に聞いたことであるが・・・）

庭園の見える窓際の椅子で、ユーリがぼんやりと過ごしていると、俄かに扉の向こうが騒々しくなり、甲高い女性の声が聞こえてきた。

「開けなさい！！私はセレドニア侯爵夫人ファメリア、王の叔母です！！！」

「し、しかし・・・」

「私に逆らうことが許されると思ってるの！？開けなさい！！！」

直後、ものすごい音を立てて『王妃の間』の扉が開かれた。

入ってきたのは、極彩色の衣装を纏った、でっぷりと太った女だった。

扉の外で散々騒いでいたので、この女性が何者かは分かった。

だが、何をしにきたのだろうか・・・
これまで、この女性のことは、エディアルドにもエレイラにも紹介されたことは無かった。

セレドニア侯爵夫人ファメリアと騒いでいた女性は、ズガズガとユーリの傍に近寄ってきた。

扉の中の護衛騎士が、あわてて彼女の後ろから近づいてくる。だがその体に触れることは無かった。

身分の高い女性に無断で触れることは、この後宮に勤めている彼らに認められた行為ではない。

必死の形相でセレドニア侯爵夫人を制止しようとするが、彼女はどんどんユーリに近づいてくる。

程なく、彼女はユーリに触れられるまでの距離に立った。ユーリのことを嘗め回すようにジロジロ見つめてくる無遠慮で容赦ない視線に晒され、ユーリは彼女と目を合わせるでもなく、ゆつくりと立ち上がって、頭を垂れた。

「・・・そなたがユーリか」
態度も声も尊大な響きを持っていた。

ユーリはゆつくりと顔を上げると、しっかりと目の前に立つ女性に目を合わせた。

「はじめまして、ですね。ユーリと申します」
再度、頭を垂れると、またすっかりと顔を上げたが、ユーリはゆつくりと、元の椅子に腰掛けた。

当然、招かれざる客・・・セレドニア侯爵夫人ファメリアに、椅子を勧めることはしない。

『王妃の間』には当然、来客用の応接セットが整えられていたが、ユーリの「売られた喧嘩は買う」生来の気の強さが、セレドニア侯爵夫人ファメリアに椅子を勧める気持ちにさせなかった。

なんじゃ、このババア。

心の中で毒づきつつ・・・こんな風に他人に立ち向かうまでに気持ちが強くなってきていることに、ユーリはひどく驚いていた。

向こうの世界で、ひどい親戚の叔母をこうやって口汚く罵って、父に怒られてた・・・

ユーリの心が元いた世界の方にトリップしかけたのを止めたのは、目の前に立つセレドニア侯爵夫人ファメリアだった。

「・・・そなたに会いたかったが、エディアルドは心の狭い男で、う・・・機会が掴めなかったが、こうして会うことができよかった」

あまり嬉しくなさそうな口調だが、なんともいえない表情でそういう彼女は、『王の庭園』を見ながら話を続ける。

「あれらの母が生きているころは、こうして『王の庭園』で遊ぶ子供たちを見つめていたものじゃ・・・」

そうしてセレドニア侯爵夫人ファメリアは、窓に近づいてそこから見える『王の庭園』に、何か懐かしいものを見つけたかのように目を細めた。

「そなた・・・『王の庭園』を散策したことは？」

セレドニア侯爵夫人ファメリアが振り返ってユーリに尋ねる。彼女は、この部屋から出たことは無かった。

ユーリが無言で首を横に振ると、セレドニア侯爵夫人ファメリアは、気の毒そうな表情をしてユーリを見つめた後、後ろに控えていた護衛騎士に大声で命令した。

「今からユーリを『王の庭園』に案内する」

そう言っ、彼女は有無を言わず、ユーリの手をとって部屋から出たのだ。

「まあ、そういうことです」

北の皇国皇帝との邂逅の後、王の間に連れてこられたユーリは、エディアルドと遅れてやって来たエレイラの前で、セレドニア侯爵夫人ファメリアとのやり取りを聞かせた。

「庭園に出た後、彼女はちょっと所用があるからと姿を消しました。……まあ、私もっと何か抵抗したほうが良かったのかも知れませんが、『王の庭園』だし、あんまり危険もないかな……と、思ったりして……」

エディアルドからひしひしと何か黒いものが漂ってくるので、ユーリは取り敢えず、少し彼から離れようとして……失敗した（涙）
離れようとした体を、エディアルドが両腕で阻止し、拳自分の太ももの上に乗せたのだ……

何の羞恥プレイ……!!

エレイラはにこにこ笑ってるし、宰相さんは目を合わせないようにしてるし、護衛騎士さんたちは笑いを堪えてるし……誰か助けて!

というユーリの心の叫びは、誰にも伝わらなかった。

「ミルドレッド、セレドニア侯爵夫人ファメリアと侯爵を呼び寄せよ」

「はい」

宰相のミルドレッドはそう答えると、王の間から退出した。

エレイラはユーリのほうを見ると、心配そうな顔をしたが、ふう、とため息をついた。

「ユーリ……そなたには魔力があり、大抵のことは心配することもあるまいが、もうちょっと危機意識を持って。」

誰もがそなたに好意的ではないのだ……特に王権が強化されて甘い汁を吸えなくなる連中にとって、そなたは目障りで、邪魔な存在なのだから」

「はい……気をつけます」

ユーリはうなだれたが、エレイラはエディアルドの方を見ると、彼に厳しい視線を向けた。

「このことについてはそなたにも責任があるぞ、エディアルドよ……ユーリは賢い娘だ。元来きちんと自分を律する力が備わっている。いつまでも一方的に扱っていいは彼女の心を得ることはできんぞ」

実に厳しい台詞を実弟に言うと、彼女も王の間から退出した。護

衛騎士はエレイラの退出と同時に扉の外に出て、王の間にはエディアルドと、ユーリだけが残った。

花を乞う男。

他のものが持ち得ない力を持つ私は、正直、他人の心の機微には疎いらしい。

自分の心にはもちろんのこと。

だが、彼女のことは本当に、心から大切にしたいと願い、それこそ何の憂いもなく、自分の傍で過ごして欲しいと思っている。

だが、それでは駄目のなのだと、姉は私に言ったのだ。

・・・だから、どうしてこんな状況になっちゃうのかなあ・・・
エレイラも、何故か近衛の皆様も退出してしまい、現在二人きりの状況にいる私とエディアルドエディアルド。

しかも、エディアルドの膝の上に乗せられるという羞恥プレイは未だ続行中です（涙）。

彼らが退出した後も、何事か真剣に考えているエディアルドの膝上から脱出しようと体を動かすけど、彼の両手はガッチリと私の腰を掴んで離しません（涙）。

はつきり言うつと。

前の世界でも、今の世界でも、正直、男性経験はありません（悲しいことに・・・）。

容姿はそんなに悪くは無いと思います。まあでも、平凡。

だけど、生まれた家のせいか、私に近づく男なんて、ホント、ろくでもない人ばかりでした。

大学を卒業したら、こんなイナカまちを出て、誰も、「私」を知らないところへ行つて、一人で暮らしていこうと思っていたのに。

まさか本当に「私」を知らない世界に来るなんて、思ってもみなかったけど。

出会った師匠や、この世界の人たちは、北の皇国の人たち以外はみな、概ね好意的で。

向けられる悪意がこんなに壮絶なものだったのかと知ったのは、師匠が殺された日で。

そしてまた、この王宮に来て、わけの分からないことで、悪意を向けられるのは……

正直、腹が立ちます。

だから、嫌だったんです。

権力者の身内になるってというのは……！！

エディアルドのこと、好きかどうかも分からないのに。

無理やりこういう状況に陥らされては、はっきり言ってドン引きです。

逃げ出したくなります。

というか、逃げてても良いですか？

「駄目だ」

いつの間にか思考が声になっていたらしい、ユーリの「逃げ出す」発言に、エディアルドはさらにキツく彼女を抱きしめて離すまいとした。

膝の上に乗せているユーリは本当に可愛らしい。黒い長い髪は上の方のみ軽く結われていて、後の部分はそのまま背中に流されていた。

衣装はアリアネンドの民族衣装で、この世界でも暖かい気候にあるこの国らしく、薄絹を何枚も重ねたふんわりとした衣装は、彼女の儂いイメージにぴったりだった。

体を動かせばさらさらとした衣擦れの音がして、それが何故か艶なまめ

かしく思える。

つまりエディアルドは、本気でユーリに溺れていた。

「最初は・・・」

何か話し出したエディアルドの方をユーリが向くと、彼は少し赤くなっていた。

はて、何か飲んだっけ？

ユーリの頭が可愛らしく傾くを見ると、エディアルドは（何故か）ますます赤くなっていくような気がする。

「魔女の到来を予知したエレイラに、迎えに行けといわれて、無理やり旅立たされた。

そのことに腹が立って仕方がなかったのに・・・ユーリが」
そういいながら、エディアルドはユーリの頬を緩く、撫でる。

その感触に、ユーリはぞわわ〜っとしたが、嫌悪感はなかった。
真剣に話すエディアルドから目を離せず、そうやって自分の頬を

撫でる彼の動きを、ユーリは止めることができなかった。

「あの池のほとりでないてるのを見て、どうしても涙を止めたく
なった。

傍に近寄って、ユーリの魔力と姉上の魔力の名残を感じて、探し
ていた『魔女』だと思ったとき・・・」

膝の上にあるユーリの体を抱きこむと、エディアルドは話を続け
た。

「どうしても、攫って、閉じ込めて、自分だけのものにしたくな
った。そのままにしておいたら、ユーリは散ってしまいそうだった
から」

はあ、と、いつになく熱いため息を漏らすエディアルドの様子に、
何故かユーリの心はざわついた。

不安になってエディアルドを見上げると、彼は彼女をとても・・・
優しい目で見つめていて、余計に落ち着かなくなった。

「閉じ込めても、こうしてユーリを狙ってやってくる愚か者がい

る・・・だから」

そう言って、エディアルドは自然にユーリにその美貌の顔を近づけた。

ユーリは自然に瞳を閉じて、エディアルドが望むように、唇をゆっくりと彼に近づける。

ゆっくりと、唇だけ触れて。

二人は少し、離れた。

エディアルドは真っ赤な顔で、目を開けたユーリに言った。

「最初から間違っていた。何も知らせず、ユーリを自分のものにしてしまえばいいと・・・そんな風に望むのは間違っていると、今は思っている。だから」

ユーリを膝の上から下ろして、ソファに座らせたエディアルドは、今度は彼女の足元に跪いた。

それから、ユーリの手をとり、そっと、手の甲に口付ける。

そのしぐさに、ユーリの顔が赤く、染まっていく。

その表情に、満足げな表情をしたエディアルドは、ゆっくりと、ユーリに告げた。

「私の伴侶となって、ずっと、私の傍にいてくれ、ユーリ」
そういったエディアルドの声は、少し震えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3612t/>

散華

2011年9月10日19時31分発行